



KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART

NO.42

神田日勝記念美術館だより



神田日勝 《牛》1964年 油彩、ベニヤ板 144.0×144.0cm 神田日勝記念美術館蔵



神田日勝記念美術館 館長

小林 潤

コロナ禍で三密を強いられ閉館を余儀なくされた日々を越え、昨年開館30周年を迎えた当館は、地方の小美術館の運営の在り様について新たな活動の展開を模索している現状にある。

施設的には、築30年を過ぎた当館各種設備の老朽化や雨漏り等が各所に出ており、これに対応する大規模改修の計画概要が示されている。これによると令和7年度実施設計・令和8年度着工となり工事期間中（工期の詳細は決定次第ホームページ等で公表）は休館せざるを得ない状況のため、その間の運営についての在り方を検討している。

そのような中で、当館所蔵のコレクション展をはじめ、釧路市立美術館とのコレクション交換展、「社会から忘れ去られてゆくもの、朽ちゆくものへ生命を吹き込む営み」が共鳴しあう日勝と半谷学とのコラボ展などの開催や子供たち対象のアート・キッズ・クラブ等の事業を開催してきた。30回を迎えた「馬の絵作品展」の巡回展は例年多数の応募をいただいている滋賀県栗東市において同市歴史民俗博物館様のご厚配により同館で開催され好評を博した。

また今年度第2回目を迎えた「未完の馬のいる風景プロジェクト」は、第43回鹿追町ふるさと産業まつりの隣接地を会場に延べ2000人にのぼる親子連れが来場し、未完の馬と写真展・

一年を振り返って

麦稈ロール滑り台などで美術館の存在を少しでもアピールできたものであり、実行委員の若い人たちや鹿追高校生たちの熱意と行動力溢れるボランティア協力に来場者からの称賛が集まり心から感謝している。

この中で未完の馬をあしらった満寿屋商店様特製のロールパン・町内菓子舗笑福様のクッキーの販売と風船くばりはどれも親子連れのお客様に絶賛であり、若い人たちの発案で美術館と一般商店様との連携がなかったことも一つの成果としたい。

一方、情報化時代への対応にはホームページのリニューアルをはじめ、Instagram・旧ツイッターのX・フェイスブックなどの利活用を積極的に駆使して幅広い客層に浸透するよう情報提供を心掛けてきた。

美術館友の会事業では、日勝逝去記念日の馬耕忌に書道家松岡一真による美術館初の書道ライブを開催し、そのほか蕪壱祭・日勝祭でも多くの参加者を得られるなど、友の会は常に美術館を支える変わらぬ存在として活動いただいていることも記しておきたい。

常日頃から多くのご来場者からの温かいお言葉等に感謝しつつ、この一年も神田日勝の顕彰を基軸に町の芸術のすそ野を広げる拠点たる施設としての運営を心掛けてきたが至らぬ点多々あり、一層のご指導を切望している。

神田一明氏、神田比呂子氏を偲んで

北海道立旭川美術館
学芸課長

藤原 乃里子



昨年度から本年度にかけての節目の季節、相次いで悲しい計報が届いた。3月14日に神田一明氏が、4月8日に神田比呂子氏のご逝去されたのである。

神田一明氏は1934年（昭和9年）、東京都に生まれた。終戦間際に一家で鹿追村（現・鹿追町）に入植。帯広柏葉高等学校から東京藝術大学に進学し、卒業後は帰道して、その後、北海道教育大学旭川分校（現・北海道教育大学旭川校）に勤務しながら行動展や全道展などの公募展で活躍。新進画家の登竜門として知られた安井賞の受賞候補になるなど、具象性を宿した表現主義的な画風で高く評価されてきた。神田日勝は彼の弟にあたる。

神田（旧姓・岡野）比呂子氏は1932年（昭和7年）、釧路市に生まれた。東京藝術大学彫刻科専攻科を修了後、帰道して釧路で教職に就くが、東京藝術大学油画科に入学し直し、2年間在学。再び帰道し、北日本学院女子短期大学（現・旭川市立大学短期大学部）等で教壇に立ちながら、全道展やグループ展等に人物を主な題材とした具象彫刻を発表。飾り気のない作風によって親しまれ、公共空間にも作品が設置されている。

一明氏と比呂子氏は1956年（昭和31年）、東京藝術大学の油画科で出会って結婚。1965年（昭和40年）、旭川に居を定

めた。美術家夫妻として知られ、二人展を開催したこともある。1999年（平成11年）、旭川市内に神田美術館を私設で開館し、両氏の各時代の作品を公開してきた。2012年（平成24年）には比呂子氏が、2015年（平成27年）には一明氏が、それぞれ旭川市文化賞を受賞している。ともに長く旭川を拠点とした夫妻から、深い人間性に満ちた芸術が生み出されてきたことは、地元にとって大きな誇りであると思う。

北海道立旭川美術館とご縁としては、1997年（平成9年）に「神田比呂子・彫刻の世界」展を開催。1992年（平成4年）に増設した常設展示室（現・第2展示室）で初めてとなる個展形式の企画だった。また2021年（令和3年）から翌年にかけての「神田一明、日勝展」（当館に続き神田日勝記念美術館にて一部新たな内容と構成で開催）は史上初めて実現した神田兄弟の二人展であり、当館としては一明氏の画業を本格的に紹介する機会でもあった。

美術界において、また当館展覧会において、本当に多くのご尽力を賜った。ご逝去から一年目の春を迎え、改めて心から感謝申しあげるとともに、謹んで哀悼の意を表したい。

【写真】神田一明氏と比呂子氏 撮影・提供：門間仁史氏

第2回「未完の馬」のいる風景プロジェクト

Instagramフォトコンテスト募集期間

期間：2024年6月15日（土）～9月29日（日）

会場：鹿追町ふれあい農芸公園・道の駅しかおい・

道の駅うりまく・千の公園

入選：6名

「未完の馬」のいる風景写真展（鹿追町ふるさと産業まつりとの連携）

期間：2024年9月29日（日）

会場：千の公園

参加者：延べ約2,000名

今回は鹿追町内各所に麦稈ロールと未完の馬を配置し、そこをビューポイントに指定して「未完の馬」のいる風景スナップ写真を募集し、Instagramフォトコンテストを開催しました。

また、第43回鹿追町ふるさと産業まつりと連携し、会場では『「未完の馬」のいる風景写真展』、麦稈ロールの滑り台などの遊び場の設置、「未完の馬」をプリントした風船の配布、「未完の馬」をあしらったクッキーとロールパンの販売を行い、多くの方々に楽しんでいただきました。



- [1] 麦稈ロールの滑り台
- [2] 第43回鹿追町ふるさと産業まつり会場にて、クッキーとロールパンの販売
- [3] ビューポイント（道の駅しかおい）に設置した麦稈ロール
- [4] 「未完の馬」をあしらったクッキー

学校連携実績

■ 立命館慶祥中学校
「北海道研修」
2024年10月4日（金）
中学1年生55名、引率5名 合計60名

■ 鹿追町立鹿追小学校
「神田日勝記念美術館社会科学習」
2024年10月9日（水）
小学4年生29名、引率4名 合計33名

■ 鹿追町立瓜幕小学校
「総合的な学習 鹿追町の産業」
2024年11月12日（火）
小学5・6年生5名、引率1名 合計6名

中学生職場体験

● 2024年10月24日（木）、25日（金） ● 受け入れ人数 1名（鹿追町立瓜幕中学校2年生）
2日間のプログラムで、美術館で日常行っている仕事を体験してもらいました。



メディア情報 （抜粋）

雑誌

アートテラー・とに～「いつかは観たい！」「この1枚」
『芸術AERA デ・キリコ大特集』 編集・発行：朝日新聞出版 発行日：2024年4月30日

堀尾 真紀子「名画に出会う 第172回 存在の不思議」
『月刊クレスコ』2024年7月号（通巻280号） 編集：クレスコ編集委員会・全日本教職員組合 発行：大月書店 発行日：2024年7月1日

新聞記事

成相 肇「新聞の鑑賞十選(6) 神田日勝「室内風景」」
『日本経済新聞』 発行日：2024年7月10日

第30回

馬の絵作品展

2024年10月8日(火)～15日(火)

鹿追町民ホール ホワイトホール

主催：神田日勝記念美術館 共催：鹿追町教育委員会・北海道新聞帯広支社
後援：北海道・北海道教育委員会・鹿追町・NHK帯広放送局・十勝造形サークル・
帯広市教育研究会図工美術部会・JR北海道・北海道電力ネットワーク(株)道東統括支店・
帯広信用金庫・北海道エンデュランス協会・神田日勝記念美術館友会の会

＜ 審 査 講 評 ＞

馬の絵作品展は今年節目の第30回になりました。
道内外から多数の作品が寄せられました。ありがとうございました。それぞれの作品には、馬と自分の関わりや思いが、画面にしっかり表現されていました。
小学校低学年は描きたい気持ちが生き生きと表された作品が多く、楽しい気分になりました。3学年から高学年に進むにしたがい、形の正確さ色彩の豊かさ、細部への気配りなどの工夫・成長が感じられる作品に出会えました。
中学生の作品は、母馬・子馬の息づかいや生命力あふれる臨場感と画面構成が見事な最高賞作品を含め、馬と背景を個性的な技法で描いた素晴らしい作品が多数ありました。
来年度も、馬を見つめる皆さんの素適な楽しい、力いっぱい作品をまっています。(森戸春樹審査委員長)

第30回 馬の絵作品展 審査結果

入 賞		
◆文部科学大臣賞	羽幌町立羽幌中学校	2年 神永 みそら
◆北海道知事賞	別海町立別海中央小学校	5年 福 岡 瑚子
◆北海道教育委員会教育長賞	中標津町立中標津小学校	4年 澤 田 晴
◆鹿追町長賞	釧路市立鳥取西中学校	3年 川 口 光咲
◆鹿追町教育委員会教育長賞	中標津町立丸山小学校	6年 坂 本 千慧
◆神田日勝記念美術館長賞	帯広市立帯広第五中学校	1年 小 林 朱莉
◆北海道新聞帯広支社長賞	札幌市立琴似中央小学校	5年 藤 井 統理
◆十勝造形サークル委員長賞	今金町立今金小学校	6年 松 本 悠
◆帯広市教育研究会図工美術部会長賞	初山別村立初山別中学校	3年 本 間 隆介
◆JR北海道社長賞	標茶町立虹別小学校	3年 大 山 和瑚
◆北海道電力ネットワーク(株)道東統括支店長賞	中標津町立計根別学園	2年 早 坂 光翔
◆帯広信用金庫理事長賞	釧路市立鳥取西中学校	3年 白 戸 唯衣
◆北海道エンデュランス協会賞	鹿追町立笹川小学校	3年 高 橋 旺佑
◆【特別賞】ほのぼの賞	守谷市立黒内小学校(茨城県)	1年 高 橋 明日咲
◆【特別賞】審査員特別賞	甲賀市立甲南第一小学校(滋賀県)	6年 渡 辺 萌

文部科学大臣賞



羽幌町立羽幌中学校 2年 神永 みそら

馬の絵表彰式

日時：2024年10月12日(土)
会場：鹿追町民ホール
ミュージカルホール
参加人数：14名(受賞者)

十勝管内をはじめ道内外より多くの受賞者・ご家族が来町され、慣れない雰囲気緊張しつつも、なごやかな雰囲気の中行われました。



応募点数

491点

■学年別応募数

《小学校》

- 1年生／36点
- 2年生／74点
- 3年生／68点
- 4年生／91点
- 5年生／45点
- 6年生／34点

《中学校》

- 1年生／45点
- 2年生／32点
- 3年生／66点

■地域別応募数

十勝／163点	胆振／1点	オホーツク／2点
石狩／46点	檜山／1点	釧路／41点
空知／1点	上川／3点	根室／14点
後志／5点	留萌／26点	
青森県／1点	埼玉県／1点	大阪府／1点
岩手県／1点	東京都／1点	兵庫県／2点
福島県／8点	富山県／1点	愛媛県／5点
茨城県／45点	滋賀県／122点	

コレクション展Ⅰ

「コレクション選～30年の歩みを振り返る～」

会期：2024年(令和6年)4月25日(木)～6月23日(日)
会場：神田日勝記念美術館展示室
出品作品数：神田日勝《晴れた日の風景》(1968年)ほか館蔵品29点
入場者数：1,682名

神田日勝の没後、地元有志による建設運動によって設立された当館は、2023年に開館から30年を迎えました。オープン以来、広く北海道内外の美術作家展を始め、各種事業を通して画家の顕彰や地域文化の振興のために寄与してきました。



本展は館蔵品の神田日勝コレクションから厳選して展示しました。日勝の画業の流れを辿ることができるよう概ね年代順に並べつつ、代わって2階では開館以来の歴代特別企画展のポスターも展示し、日勝の作品と合わせて30年の歩みをご覧いただきました。
(本展担当者：杉本圭吾)

コレクション展Ⅱ

「牛馬は何を語るのか？」

会期：2024年(令和6年)12月11日(水)～2025年(令和7年)4月13日(日)
会場：神田日勝記念美術館展示室
出品作品数：神田日勝《馬》(1965年)ほか館蔵品37点
入場者数：888名(2025年3月31日時点)

1945年8月、戦いの東京を離れ、神田日勝は家族とともに北海道・鹿追に渡ってきました。鹿追到着後まもなく敗戦を迎え、疎開の目的を失った一家はしかし、開拓農家としてここで生きる道を選びます。
日勝は、中学卒業後に家業の農業を継ぎますが、農作業や搾乳作業に従事する傍ら絵を描き続けました。32年という短い生涯を通じ、主に自

分の生活に根ざしたものを画題に選びましたが、中でも頻繁に画面に登場したのが「牛馬」でした。
本展ではそれら日勝が描いた「牛馬」に注目しました。農耕馬、乳牛、亡骸、風景の中の牛馬など、様々な描かれ方をされてきた牛馬たちを、日勝以外が手掛けた牛馬の絵と共に並べました。
(本展担当者：杉本圭吾)



特別展

神田日勝記念美術館×釧路市立美術館所蔵作品交換展

「コレクションが出会う道東」

会期：2024年(令和6年)4月27日(土)～6月16日(日)
会場：釧路市立美術館(釧路市生涯学習センター3F)
出品作品数：神田日勝《牛》(1964年)、柳悟《烈聖牛》(1974年)ほか42点(うち、神田日勝記念美術館所蔵作品22点)
入場者数：2,214名



関連イベント

特別ギャラリートーク

日時：5月25日(土) 会場：釧路市立美術館展示室
講師：杉本圭吾(神田日勝記念美術館学芸員) 参加者数：34名

巡回展

北海道中標津町

道立ゆめの森公園

2024年11月8日(金)～11月17日(日)

展示作品 入賞・入選・佳作・地域出品作品(根室内)

滋賀県栗東市

栗東歴史民俗博物館

2024年11月30日(土)～12月15日(日)

展示作品 入賞・入選・地域出品作品(滋賀県内)

北海道帯広市

帯広信用金庫中央支店 おびしんふれあいギャラリー

2025年1月9日(木)～1月24日(金)

展示作品 入賞・入選

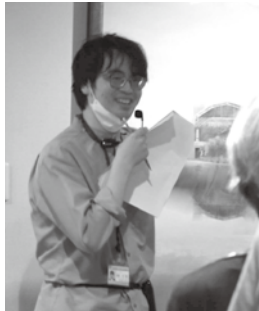


コラム

『所蔵作品交換展を振り返って』

釧路市立美術館 学芸員 沼前 広一郎

釧路市立美術館では2024年4月27日(土)～6月16日(日)の会期で「コレクションが出会う道東：神田日勝記念美術館×釧路市立美術館所蔵作品交換展」を開催いたしました。
杉本学芸員から展覧会の打診を受けた際には、とても興味深く思うと同時にどのような切り口で展覧会を構成しようかと頭を悩ませました。杉本さんからは日勝が出品していた全道展を軸に両館の作品を通じて道東地域の美術を通観するという視点を提示いただきましたが、その視点にただ乗っかるだけではせっかく両館で開催する意味が薄れてしまいます。そこで当館では道東地域の美術史を語るという文脈をベースに両館の作品で「同じ会場で並べたときに興味深く見える組み合わせ」を意識して会場を構成しました。
ちなみに「道東」を「ばしょ」と読ませるタイトルには、「道東」の美術館同士が協力し、地域の美術史を紹介する「ばしょ」を作りたい、という意味を(私個人としては…)込めています。今後とも両館で実りある交流ができれば大変うれしく思います。



令和6年度 特別企画展

会期：2024年(令和6年)6月26日(水)～
9月16日(月・祝)
会場：神田日勝記念美術館

主催：神田日勝記念美術館
後援：鹿追町、鹿追町教育委員会、神田日勝記念美術館友の会、
鹿追町文化連盟、北海道新聞帯広支社、十勝毎日新聞社、
NHK帯広放送局、JAGA、おひひろ市民ラジオFM WING
協力：釧路市立美術館

出品作品数：37点 入場者数：2,984名

神田日勝記念美術館×釧路市立美術館 所蔵作品交換展

コレクションが 出会う道東

神田日勝（1937-1970）が若くして知事賞を取った全道展では、かつて十勝と釧路は同じ「道東支部」でした。当時の支部短信には日勝と並んで釧路在住の作家が名を連ね、中には日勝同様、中央画壇への挑戦を試みた作家もいました。

本展は、釧路ゆかりの作品を所蔵する釧路市立美術館との所蔵作品交換展として開催されました。釧路市立美術館のコレクションを借用し、神田日勝の作品をはじめとする当館のコレクションと並べることで、両館の作品の類似・対比によって、十勝と釧路を中心とする「道東」地域の美術をご覧いただきました。

章構成は「第1章 道東美術の草創期」「第2章 道東に生きる人びと」「第3章 道東と全道展」「第4章 道東と独立展」「第5章 道東の風景」の全5章からなります。道東美術の勃興から始まり、基本的には年代記的に並べてその変遷を辿りつつ、人物・風景といった題材にも注目しながら作品を紹介しました。

第1章では十勝・釧路それぞれの美術のおこりを紐解きました。釧路では1921年に「青空画会（現：釧路美術協会）」が、十勝では1927年に「平原社美術協会」が設立され、現在に至るまで全国規模の公募展でも活躍する画家を輩出していきます。日勝が18歳のとき初出品初受賞（1956年）したのもこの地元公募展でした。また十勝・釧路の双方に密接なかわりを持つ画家に寺島春雄がおり、彼が帯広転居後には日勝を含め十勝の若い画家に大きな影響を与えました。視野を全道へ広げると、のちに日勝も応募する「全道美術協会（全道展）」が戦後まもなく創立されます。小川原脩、国松登ら、戦中戦後の混乱の中で北海道へ帰郷した作家や疎開作家を中心に旗揚げされ、日勝をはじめ道東から全道、そして全国へ羽ばたいていく作家を輩出していきました。

戦後、北海道学芸大学釧路分校（現：北海道教育大学釧路校）が設置され、卒業生が道東各地へ教員として赴任していきます。釧路では全道展出品者の多くは同校の教官または卒業生であり、1962

年に彼らを中心に「ノワール美術同人会」が創立されます。十勝にもこの頃同じ風潮があり、教職員によって「荒土美術会」が創立され、のちにノワール会とも合同展を開いています。日勝に会員資格は無かったものの、展覧会に顔を出し、図録に文章を寄せるなど、荒土会に親近感を覚えていたと言われます。

第2章ではそれぞれの会に所属した画家の作品を通して道東の「人々」に焦点を当てました。日勝の《飯場の風景》（1963年）では冬山造材に従事する男たちが休息する様子が描かれ、《静物》（1966年）では西洋における静物画としてではなく「生きる糧」として果物等が描かれており、当時の労働者や農民の暮らしが窺えます。釧路の画家の作品にも相通ずる雰囲気があり、川瀬敏夫の《人たち》（1975年）では魚を売る老女が描かれ、望月正男《入り陽》（1973年）では労働者の姿はないものの、太陽に照らされる漁船からは漁業で賑わい躍動感あふれる釧路港の活気を伝えます。

第3章では道東と全道展とのかわりに注目しました。1966年の米坂ビデノリによる十勝・釧路を俯瞰した短信では、道東で活躍を期待する画家の名として、十勝からは神田日勝やおおとひでお、釧路からは川瀬敏夫や柳悟の名前が挙げられています。当初は十勝と釧路は同じ地区として括られていましたが、十勝では1967年、のちの十勝支部に連なる「全道展作家展」が日勝の発案で開かれます。第16回全道展（1961年）において23歳の若さで北海道知事賞を受賞していた日勝は、十勝の他の画家たちにとって憧れであり、彼に続くように「園部信二、渡辺禎祥らの、いわばリアリズムの展開の流れと、おおとひでおの熱い具象の流れ*1」が十勝を牽引していきます。釧路においても日勝は大きい存在だったようで、のちに釧路での神田日勝展（1980年）開催に尽力した望月正男は「かつて全道展で土の匂いを感じエスプリがあるという印象で関心をもっていた*2」と述べています。

続く第4章では、道東と独立展のかわりに注目しました。十勝では釧路から移住した寺島春雄が当地唯一の出品者として後進に影響を与え、



その後日勝が独立展入選を果たすと、おおとひでお、渡邊禎祥らが続いて入選しました。釧路では、小林数、川本ヤスヒロらが独立展に出品し、また出身ではないものの釧路を題材とした作品を手掛けた画家に松樹路人がいました。松樹は日勝が応募していた時期は会員として講評する側で、日勝が《馬》・《死馬》で入選した際、「独立のなかではすくない仕事だが、現在の仕事を更に徹底しておし進めて欲しい。『曹良奎』に似通った処が、とれたことが良い*3」と評しています。

しかし日勝は、初入選から4年連続の入選で会友となりますが、終ぞ入賞することはできませんでした。画業後期の日勝は、初期の茶褐色のリアリズム描写から画風が大幅に転換しますが、ポップアートを思わせる《ヘイと人》でのポスターや広告の描写や、アンフォルメルを思わせる《人と牛C》での原色多用と抽象表現の導入に、独立展での評価を目指して試行錯誤する画家の姿が想起されるようです。

最後に第5章では風景画に焦点を当てました。漁港を玄関口に街を形成した釧路は、1907年に札幌・旭川と鉄路で繋がったことを機に発展し、戦後は特に原田康子『挽歌』のベストセラーと観光ブームによって「日本における西洋」のイメージを帯びるようになります。風景画では釧路湿原や摩周岳といった従前からの観光地も描かれますが、最も題材に選ばれているのは幣舞橋です。戦前より「市の精氣は實に此の橋より生ずる」「此の橋よりの眺め又、此の橋の眺むる眺め共に好個の畫額*4」と謳われる名橋は、絵画でも風土、人間、文化、果ては観光をも含めた、釧路そのものを象徴する存在として描かれています。

一方、日勝が描いた十勝の風景画は秋景が多く、また《離農》（1969年）を始めとして荒涼とした空気が漂っているのが特徴です。秋は本来収穫で活気づく季節ながら豊穡の雰囲気は感じられず、十勝の肥沃な大

地を描いていながらもどこか沈鬱としているようです。

しかし画業初期から日勝のまなざしは人間の営為に向けられていました。厳しい環境の中で働く人々、時代の変化とそこで生きる人々をつぶさに見つめることは、自分自身の生を見つめ、自分自身の現実を描くことでもあったのです。（本展担当者：杉本 圭吾）

*1 竹岡和田男「日参 全道展」『美術ペン12』、1970年、美術ペンクラブ。 ※名前表記は原文ママ。
*2 望月正男「神田日勝展によせて」『いのちの実景—没後10年 神田日勝展（図録）』、1980年。
*3 松樹路人「第33回独立展評」『独立クロニクル』、1965年、独立美術協会。
*4 成田正徳(編輯)『釧路観光案内』、1937年、釧路商工會議所。

関連イベント

■ギャラリートーク

- 第1回 7月 6日(土) 参加者数：13名
- 第2回 9月14日(土) 参加者数：5名

■特別ギャラリートーク

日時：8月3日(土)
講師：沼前広一郎氏（釧路市立美術館学芸員）
会場：神田日勝記念美術館 展示室
参加者数：32名



企画展

「神田日勝×半谷学 いのちのつながり」

会期：2024年（令和6年）9月21日（土）～12月8日（日）
会場：神田日勝記念美術館
出品作品数：半谷学作品4点、神田日勝作品ほか館蔵品25点
入場者数：2,339名

主催：神田日勝記念美術館展覧会事業実行委員会
共催：神田日勝記念美術館、神田日勝記念美術館友の会
後援：北海道新聞帯広支社、十勝毎日新聞社、NHK帯広放送局

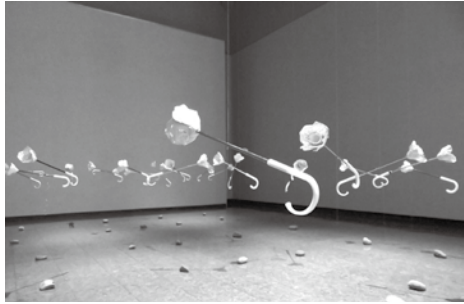
関連イベント：
＊第21回日勝祭 アーティスト・トーク
日時：12月8日（日）15:30～16:30
会場：本展会場 参加者数：60名

本展は、「再生」をテーマに作品を作り続けている北海道帯広市出身の現代アーティスト・半谷学(1963-)と、神田日勝の絵画とのコラボレーション展覧会として開催しました。半谷作品の素材に用いられているのは、傘置き場に置き去りにされたままの傘や、牡蠣養殖の過程で廃棄された海藻など、現代社会の中で人々から忘れ去られるものです。他方で日勝は、朽ちた家、空き缶、動物の亡骸などを画題として多く描いてきました。生きた時代は異なりますが、両者の試みはともに「社会から忘れ去られるもの・朽ちゆくものへ生命を吹き込む」ものとして共鳴しうるものです。

本展では当館所蔵の《ゴミ箱》、《牛》、《離農》など、日勝の絵画が並ぶ空間で、《さしがさばな - 差傘花14》や《Coral HAL 5》など半谷学の立体作品を展示し、二人の作品の競演をご覧くださいました。

また展覧会初日・二日目はワークインプログレス形式として、半谷による創作過程を来館者に公開。展覧会最終日にはアーティスト・トークとして、半谷による自作解説もおこないました。

（本展担当者：杉本圭吾）



2025年の当館展覧会は小川原脩展、そしてクスミエリカ展を開催！

特別企画展 「神田日勝記念美術館×小川原脩記念美術館所蔵作品交換展 二人の歩んだ道」

会期：鹿追会場：2025年12月3日（水）～2026年3月29日（日）
俱知安会場：2026年4月上旬～7月中旬ごろ予定

小川原脩記念美術館は、戦前は東京で前衛絵画を、戦後は郷里・俱知安に居を構えて60年以上制作を続けた画家・小川原脩の作品を展示しています。

小川原の画業は、戦前のシュルレアリズムへの傾倒、戦後に入っての北海道的な題材への取り組みや、縄文文化・シャーマニズムへの接近、そして動物をテーマにした作品を経て、晩年のチベット・インドへの接近と、生涯にわたって様々な画風の変遷をたどりました。日勝もまた、生涯を通じて、戦後社会派リアリズムや、ポップアートを思わせる色彩の氾濫、そしてアンフォルメルなど、自らの画風を最後まで模索し続けました。

また小川原は、犬や白鳥といった動物たちの姿に人間社会の構図を投影することで社会における在り方を表現しようとし、日勝もまた農業に従事する傍ら身近な題材をもとに絵を描き続けることで、没個性化していく人間社会へ警鐘を鳴らしました。

戦後の激動の時代にあって、芸術を通じて自己の確立を目指した二人の画家。両者がそれぞれ歩んだ画業をご覧くださいます。



小川原脩《大白鳥》1978年
小川原脩記念美術館蔵



クスミエリカ《追憶》2023年 作家蔵
©Erika Kusumi

企画展 「神田日勝×クスミエリカ 不在の気配、存在の痕跡」

会期：2025年6月25日（水）～9月28日（日）

クスミエリカは、札幌市出身・在住の写真家・美術作家です。

さまざまな場所、人、建物、動物など、自分自身で撮影した写真のみを素材に、時間も空間も異なるそれらをデジタル技術により加工（デジタルコラージュ）し、多くの写真を幾層にも重ね合わせた作品を制作するクスミのアートワークは、誰もが目にする現実の風景を再構成しています。日勝もまた、自身の生活に根差した身近なモチーフや十勝の風景を題材としつつも、実際の光景をそのまま写し取るのではなく、画家の脳内で再構成した独自のリアリズムを絵画で表現しており、この両者の制作活動と相通ずるものがあります。

クスミの表現する「非現実の世界が現実の延長・平行線上にある」作品と日勝の絵画を同じ空間に展示することで、互いの作品の特色を浮かび上げらせ、日勝の捉える「社会」や「世界」、果ては神田日勝という「存在」について迫ります。

第21回 日勝祭

半谷 学
アーティスト・
トーク抄録



講師：半谷 学 氏

□ 作家略歴 □

半谷 学 美術家

1963年、北海道帯広市生まれ。1988年、武蔵野美術大学大学院造形研究科修士課程修了。個展での作品発表をはじめ、国内外のアートプロジェクトへの参加、各地の公共空間への作品設置、また造形ワークショップの主宰など、様々な活動をおこなう。現在は群馬県みなかみ町と北海道帯広市に拠点を置き活動。主な展覧会への出品として、「昨日の名残：明日の気配」（札幌芸術の森美術館/2023年）、「中之条ビエンナーレ2023国際現代芸術祭」（群馬県中之条町/2023年）、「半谷学展 さしがさ花の花ひらくころ」（網走市立美術館/2020年）、「半谷学展 アートの森で遊ぶこと」（帯広市民ギャラリー /2015年）など。

私の両親は元々酪農をしていました。当時は電気が通ってなかったので、灯油ランプの明かりで夜を過ごした記憶があります。今でも覚えているんですが、夜は真っ暗で星がすごく明るく感じました。昼には小川を触って「水って冷たいんだな」とか。牛を見て「なんて大きいんだろう」「どうして白と黒の模様がー頭ー頭違うのだろう」とか。その頃の思い出は作品を制作する時にずっと忘れないでいることでもあります。自然に近い材料とか素材を使うことが多いのですが、子どもの頃の印象は自ずと出てきます。

美術大学を卒業して色々アルバイトをしましたが、もう一つ、私が作品を作る上で大事にしている考え方がその時に生まれました。1980年代後半から90年代、自分が将来どうなるのか悩んでいる一方、日本ではちょうどバブルの頃です。当時住んでいた安アパートの前にたくさん粗大ごみが並んでいました。テレビ、ダイニングテーブル、二層式洗濯機、リビングのソファー、そういったまだまだ使えるようなものが並んでいて、時々拾って使っていました。その出来事がすごく印象深くて、今も社会の中で行き場がなくなってしまった物を作品の材料に使っているのは、この経験があるからです。私自身は社会の中で、人が見過ごしてしまうようなことに自分が美術作品を作るための意味があると思って、今、制作しています。

ワンガリ・マータイさんの「MOTTAINAI」という国連でのスピーチや、ユネスコが提唱している「持続可能な開発目標（SDGs）」。最近ですと「アップサイクル」という、古くなったものに付加価値を付けて新しく生まれ変わらせる。そういったことが私の制作の原点に近いものです。そして常に社会が変わっているの、私自身は決して押し付けるような作品、導こうという作品を作るではありません。時々気づいていただ



けたら嬉しい、そういうような形と気持ちで制作をしています。

例えばこれは《差傘花》という名前の作品です。最初、作品を作ろうと思った時にいらない傘を集めようと思ったんです。お世話になっているのは帯広市内の高校です。年度が入れ替わるときにどうしても捨てなければいけない傘がいっぱい出るということでいただいております。花の形の材料は、実は帯広市民劇場（現：帯広市民文化ホール）で昔、緞帳を上げ下げするのに使われていたロープなんです。それを切って、ほぐして、よく洗い、煮る。そうすると麻の繊維が柔らかい感じになるんです。それを一枚一枚、私が花びらの型に被せて形を作って花にしています。

会場には四体の大きな傘の形をした竹の作品（注：《自然の傘》）が吊り下げられています。実は今、竹は厄介者扱いされています。プラスチックがそれまでの竹の仕事をほとんど奪って需要がなくなってしまって、いま日本の竹林が荒れてしまっています。私も美術家の一人として、竹を上手に使う方法はないのかということを考えて生まれた作品です。傘というのは人を守るためのものだと考えています。雨や、強い太陽の光から、人を守る。ご存じの通り2011年に東日本大震災が起きました。原発が残念ながら壊れてしまって、いろんな物質が外に出てしまった。そういった物質から守る術が今無いのだと思ったときに、人間のできることはもう限られていて、自然の治癒力に頼るしかないんだと思い、葉っぱですとか、傘の骨の部分もなるべく生の素材を使って表現したいと思って作った作品になります。

《Coral HAL》のコーラルというのは珊瑚のことです。沖縄で、海岸に色んな珊瑚の欠片が白い塊になっているのを見たときにすごいと思ったんです。珊瑚礁って島のようにできるんですけど、元は珊瑚とか放散虫とか、生き物の骨格でできているんです。その地球の在り方にすごく感動した覚えがあります。私もいのちを終えたときに地球の一部になれたらいいなと。2階の《Coral HAL》は同じく球体にしようと思ったんですが、組み立てるときに歪んでしまって、でもせっかく作ったから見せたいというエゴですよ。そのやり方も体験として得られる、次につながると思ったので。

ただ、美術というのは失敗を繰り返しながら次へ進んでいきます。美術というのは本当に実験であり、その積み重ねで次の成功やいつかの成功に向かっていくということでも良いのかな、と。美術というのはどちらかというと考え方をご覧いただく側面もありますので、ご覧になった方がどのように感じ取られるかは、それはもちろんお任せいたします。

※講演会の全文は4/1以降、当館HPで公開します。

第30回
燕壑祭

日時：2024年6月15日(土)18:00～19:30

会場：神田日勝記念美術館 展示室

内容：木管五重奏団『sora(ソラ)』による演奏会

参加者数：72名

木管五重奏団『sora（ソラ）』による演奏会が美術館展示室で行われました。フルート、オーボエ、クラリネット、ホルン、ファゴットの5種の楽器からなる木管五重奏が繊りなす温かく心地良い音色が、展示空間いっぱいに広がり出演者と来場者共に開館を祝いました。



第32回
馬耕忌

日時：2024年8月25日(日)14:00～15:30

会場：鹿追町民ホール ホワイトホール

内容：松岡一真(本名:篤志)氏による書道ライブ「日勝を書く」

参加者数：150名

「馬耕忌」恒例となっていた野の花による祭壇の代わりに舞台上に日勝の遺影と日勝作品『室内風景』のパネルを掲げ、9幕構成で日勝の作品に寄せる自身の想いを語りながら松岡一真氏による揮毫が行われました。終盤には、観客席にいた合唱団による「大地讃頌」が響き渡り会場を盛り上げ、例年とは違った形での神田日勝を偲ぶ集いとなりました。

第22回 日勝祭

日時：2024年12月8日(日)

第1部：15:30～16:30 半谷学アーティストトーク

第2部：16:30～17:30 田中光俊ギター演奏

第3部：17:30～19:30 懇親会

会場：神田日勝記念美術館 展示室／ロビー

参加者数：60名

第1部では、当日まで開催された展覧会出品作家である半谷学氏による作品解説などが、第2部では、昨年に引き続きクラシックギタリスト田中光俊氏によるギター演奏が美術館展示室で行われました。第3部は、美術館ロビーに会場を移し出演の二人を囲んでの懇親会が行われ参加者同士で親睦を図り神田日勝の生誕を祝う会を終えました。



芸術鑑賞
バスツアー

日程：2024年10月5日(土)

行先：民族共生象徴空間 ウポポイ(白老町)

参加者数：33名

バスツアーは5年ぶりの開催となりました。ウポポイの開業から4年経っていますが、依然として人気があり、募集開始直後すぐに満員となりました。民族共生象徴空間および国立アイヌ民族博物館にてアイヌ文化に触れることができました。



感想ノートより

母と妹ときました。
スゴイインパクトあったけど、面白かった！
(2024年5月26日)

從澳門來北海道,高興認識神田日勝先生的事蹟及他的作品！
(2024年8月9日 K.M)

コロナが流行しはじめた頃東京駅のギャラリーで日勝さんの展示を知り出掛けるつもりが中止になり、とても残念な思いでした。あれから、4年位経った今は、娘達の誘いでやっと実現し、絵にお目にかかり、何か、ドキッ!とし、何とも言えない気持ちにひたりました。
素晴らしい経験をいただき、最高に素晴らしい旅となりました。
ありがとうございます。
(2024年8月 三重県)

福岡からきて、この美術館でゆっくりと、「生きる」を感じました。
生涯を一生懸命生きている姿を見て、自分の生き方・在り方をふり返りました。
今日は、娘と2人、それを共有し、感じることで嬉しく、思います。
絵は、あまりわかりませんが、とても印象に残る場になり感謝しています。
ありがとうございました。
(2024年10月6日 S)

2020年に近代美術館で見て、ずっと行きたかったのですが、やっと行くことができました。今、高校生ですが、馬が好きで、これから馬の仕事をしていく予定です。
これからもずっと好きです。またいつか来ます。
(2024年10月13日)

広島から来ました。日曜美術館を見て、神田日勝知りました。
兄も絵が好きでよくいろんな絵をかいていました。
今年7月、兄がなくなり、追悼をかねて、釧路ステイ10日間を利用して来ました。馬の目が何か話しかけているような気がします。
心に残る馬です。
(2024年10月31日 N)

ぐうぜんでしたが、日勝さんのお誕生日に伺うことができました！
半谷さんの作品も見ることができて大充実でした！
普段、気に入った作品のポストカードが置いてあることがなかなか無いのですが、展示でひときわ目をひいた「牛」を購入することができて、本当に嬉しかったです！
また来ます。
(2024年12月8日 神奈川 T)

大学卒業研究で、神田日勝さんをテーマにしたので今回やってきました。
やっと本物の作品を見ることができて、とてもよかったです。
当時と今とじゃ、まったく鹿追の様子なんかちがうだろうけど、日勝と同じ場所にこうして来ることができて感動しています。
また機会があれば、ここに来てみたいです。
2025年も、良い年になりますように...!!
(2025年1月5日 M)

SNSより

ただいま釧路
市立美術館で #神田日勝 見てきた
いかにも、の絵だけでなく、『水辺の馬』とかの風景画も素敵★
幣舞橋（読める？）めざして歩いていたら見つけたお花★
(2024年6月15日)

鹿追町 神田日勝記念美術館
念願の『馬（絶筆・未完）』を見ることが出来た
その絵の前で何分も佇んで毛の筆跡一本一本まで忘れないようにじっくり見た
十勝方面行く人がいたら是非訪れてほしい美術館。感動と圧巻と、過去に確かにこの絵を描いた人が居たということの実感に包まれる。必ず。
(2024年7月14日)

神田日勝の絵、システィーナ礼拝堂と同じくらい生で見たくて来たる。
見た瞬間に鳥肌立つくらいすごい。その辺にあるようなベニア板に執拗な毛並みの描き込み。メインから描いていく描き方も何もかもものすごい。この人は本物の絵描きだったんだ…涙が出る。
(2024年7月20日)

名画がどんなのかわからないけど、印象に残ってる絵画だと、ずっと昔に北海道で見た神田日勝の絶筆の馬の絵とか、すごく記憶に残ってるなあ
(2024年8月6日)

神田日勝記念美術館で『馬（絶筆・未完）』という作品を見た時は、未完の美を強烈に感じた。
絵を部分的に完成させていく描き方をするらしく、この馬も上半身は仕上がってる。そのせいか生々しい生命力を感じるし、でも未完であるところに儚さや哀愁を強烈に感じて、結局1時間近く見てた気がする。
(2024年10月15日)

※ノートにお名前を記載いただいている場合はイニシャルで表記しました。 ※SNSアカウント名は省略し、絵文字は「★」で表記しました。
※誤表記と思われる部分も原文のまま表記しました。

NEWS

大規模改修に伴う
臨時休館のお知らせ

施設老朽化のため、周辺施設を含め当美術館は改修工事が予定されており、現在計画が進んでいます。着工は令和8年度となっていることから同年度当初から休館を予定しております。工期等詳細が決定次第、随時ホームページなどで発信してまいります。
ご不便をおかけしますがご理解いただきますようお願いいたします。

ドリップバッグコーヒー販売開始！
セルフドリップコーナーも

4月より新グッズとしてドリップバッグコーヒーの販売を始めました。コーヒーは、地元鹿追町内の焙煎店から仕入れ新鮮なものを提供しています。ロゴマーク入りのパッケージでお土産などとしてお持ち帰りできるほか、専用ケトルとロゴマーク入り紙コップなどを用意し当館ロビーに設置したカフェカウンターでセルフドリップによりお飲みいただくこともできます。
鑑賞後、コーヒーを飲みながらくつろぎのひと時をぜひお楽しみください。

— 10 —

11

アート・キッズ・クラブ

●会場：鹿追町民ホール(第2回・第5回除く)

各種青少年対象事業を統合し、全6回のプログラムとして実施しました。
事業を通して子どもたちからは、
創意工夫する喜びや楽しさを感じる様子が伺えました。

- ①「どんな色のコースターになるかな？」 ●2024年5月11日(土) 参加人数: 23名
- ②「子ども芸術鑑賞ツアー」 ●2024年7月20日(土) 参加人数: 17名 見学施設: 音更ふるさと資料館(音更町)、巨大じゃがいもアート館(芽室町)
- ③「オリジナル絵の具を作ろう！」 ●2024年8月3日(土) 参加人数: 20名 講師: 沼前広一郎 氏(釧路市立美術館学芸員)
- ④「おかしなミニかさを作ろう！」 ●2024年12月7日(土) 参加人数: 10名
- ⑤「マイカップを作ろう！」 ●2025年1月9日(木) 参加人数: 23名 会場: 陶芸工作館 講師: 講師: 三上慶耀 氏(日本工芸会)
- ⑥「とんぼのキーホルダーを作ろう！」 ●2025年3月22日(土) 参加人数: 13名



新収蔵品紹介(寄贈作品)

神田日勝《人間》1964年頃 油彩、ベニヤ板 37.7×38.2cm 【画像1】
以上1点、神田眞理氏より寄贈

斎藤吾朗《色丹島のコサック少女》2001年 油彩、キャンバス 55.5×58.0cm 【画像2】
斎藤吾朗《モナリザ500年 おばあさんのモナリザ》2003年 版画、紙 23.7×30.5cm 【画像3】
以上2点、斎藤吾朗氏より寄贈

岡田敦《Yururi Island 2013》2023年 ラムダプリント 122.4×182.4cm 【画像4】
岡田敦《Yururi Island 2013》2023年 ラムダプリント 122.4×182.4cm 【画像5】
岡田敦《Yururi Island 2014》2023年 ラムダプリント 122.4×182.4cm 【画像6】
岡田敦《Yururi Island 2017》2023年 ラムダプリント 122.4×182.4cm 【画像7】
岡田敦《Yururi Island 2017》2023年 ラムダプリント 122.4×182.4cm 【画像8】
岡田敦《Yururi Island 2018》2023年 ラムダプリント 122.4×182.4cm 【画像9】
岡田敦《Yururi Island 2019》2023年 ラムダプリント 122.4×182.4cm 【画像10】

岡田敦《Yururi Island 2019》2023年 ラムダプリント 122.4×182.4cm 【画像11】
岡田敦《Yururi Island 2020》2020年 ラムダプリント 84.1×118.9cm 【画像12】
岡田敦《Yururi Island 2020》2020年 ラムダプリント 84.1×118.9cm 【画像13】
岡田敦《Yururi Island 2019》2020年 ラムダプリント 118.9×84.1cm 【画像14】
岡田敦《Yururi Island 2019》2020年 ラムダプリント 118.9×84.1cm 【画像15】
岡田敦《Yururi Island 2019》2024年 ラムダプリント 84.1×118.9cm 【画像16】
岡田敦《Yururi Island 2019》2024年 ラムダプリント 84.1×118.9cm 【画像17】
岡田敦《Yururi Island 2013-2021》2023年 映像作品
岡田敦《Yururi Island 2018-2021》2025年 映像作品
以上15点、匿名希望者より寄贈

古賀喜久男《不詳》1968年 ペン、紙 31.8×22.7cm 【画像18】
古賀喜久男《不詳》1973年 ペン、紙 54.5×39.4cm 【画像19】
以上2点、白木さち子氏より寄贈



【画像1】



【画像2】



【画像3】



【画像4】



【画像5】



【画像6】



【画像7】



【画像8】



【画像9】



【画像10】



【画像11】



【画像12】



【画像13】



【画像14】



【画像15】



【画像16】



【画像17】



【画像18】



【画像19】



@kandanissho



@kandanissho



「神田日勝記念美術館」で検索

公式サイト

<https://kandanissho.com>